ふるさと再発見！ VOL.23

ほっとわかやま





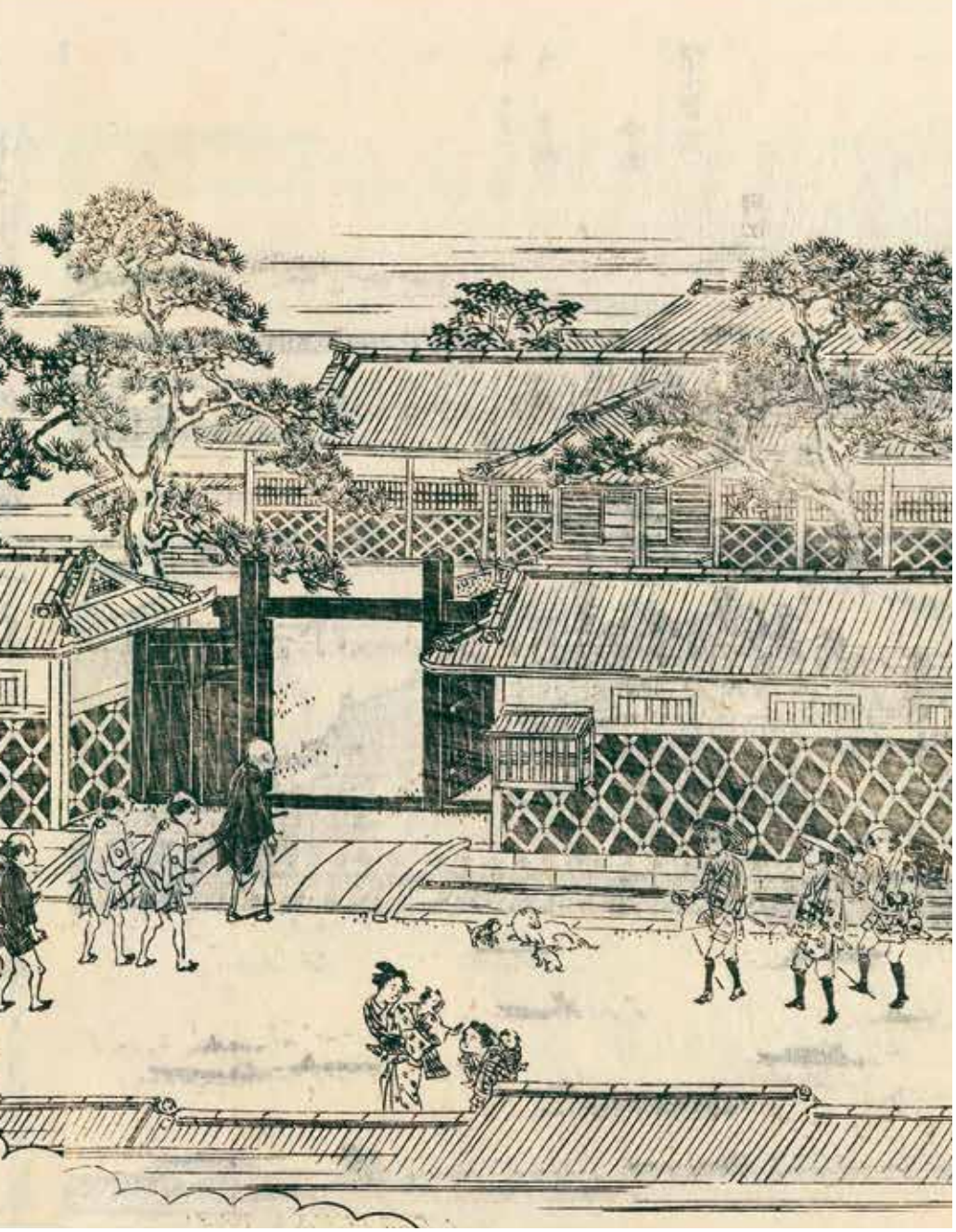






巻頭特集 医の紀州 ～ 江戸蘭学のトップランナー ～

散策 華岡青洲ゆかりの地を巡る
ものづくりat橋本市 高野口パイル ～“ふわふわ”を活躍させる産地力～
わかやま魅力発信人 村瀬憲夫さん ～万葉の息吹を伝える～
I♥WAKAYAMA 私の和歌山 歴史とフルーツあふれる紀の川市 ～紀の川市長～ 中村 愼司



医の紀州

江戸蘭学のトップランナー

現在でも、人口に対して全国有数の病床数を誇る和歌山県。その歴史を紐解けば、江戸時代の昔から紀州は医療のトップランナーだった。歴史に名を刻んだ紀州の最先端医療とは―。

学問大好き徳川治宝

江戸時代、紀州藩の医学発展に貢献した人物としてまず挙げられるのが、第十代藩主の徳川治宝（はるとみ）だ。

寛政４年（１７９２）、和歌山城下（現在の本町３丁目）に医学館を創設し、藩の医師やその門弟に、従来の漢方に加え、蘭方の外科技術などを学ばせた。

文化・芸術面で数々の功績を残した治宝は、藩士の教育にも力を入れた。医学館のほか、江戸の紀州藩邸に明教館（めいきょうかん）、松坂城下にも学問所を設けている。

医学館での教育は当時の最先端のものだったようで、嘉永７年（１８５４）に江戸に蘭学所が開設された際には、紀州藩医が蘭方の教授として派遣されている。また、紀州藩医から幕府の医師に登用される例もあった。



紀州藩の学習館―『紀伊国名所図会（後編巻之一）』より



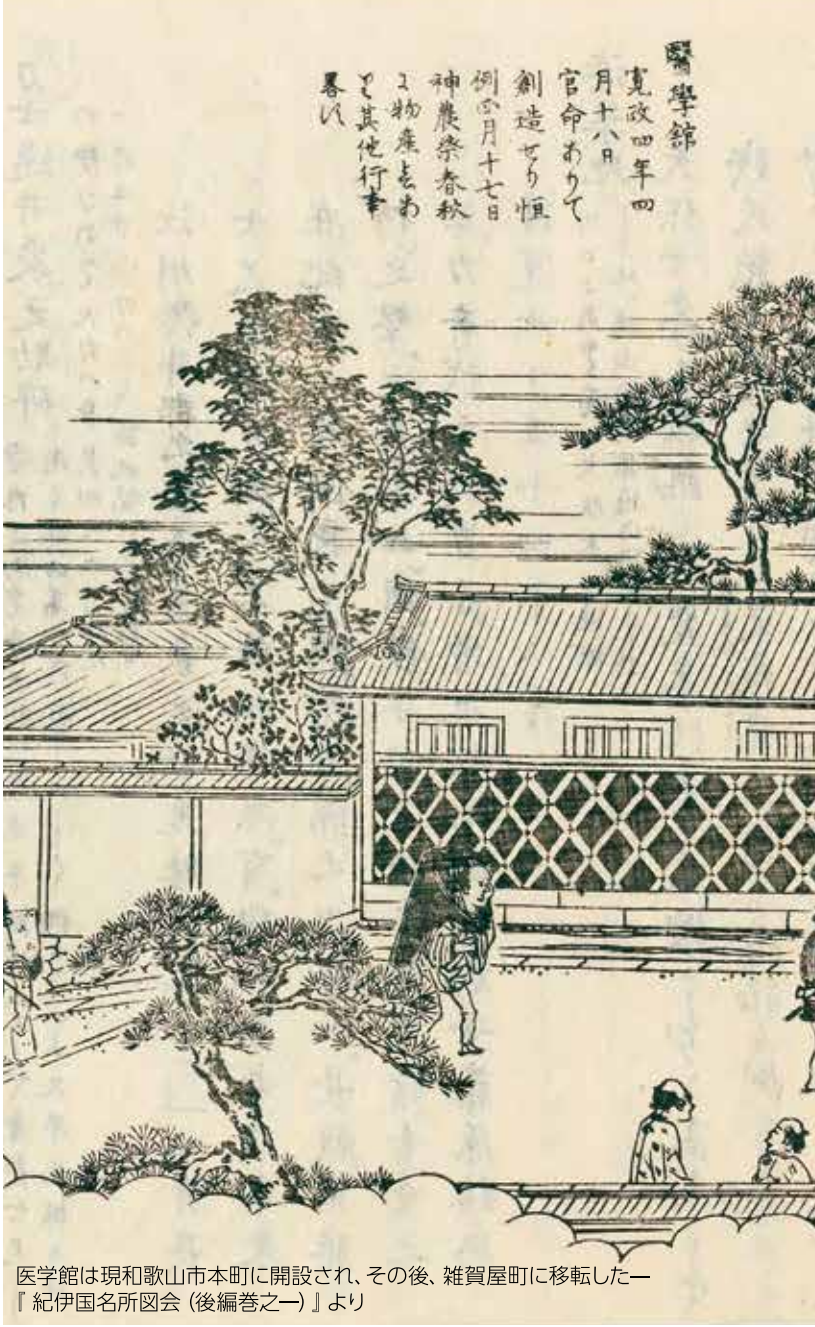
県内に残る医学者の碑ー 白浜町久木



江戸時代の種痘ー『新訂種痘奇法』より



高橋克己の生誕地ー 和歌山市木ノ本



医学館は現和歌山市本町に開設され、その後、雑賀屋町に移転したー
『紀伊国名所図会（後編巻之一）』より

日本に西洋医学が導入された時代、紀州藩の医師たちが果たした役割は大きい。

種痘と麻酔

江戸時代に最も恐れられていた病のひとつに、天然痘がある。18世紀末に天然痘ワクチンが開発され、これを接種する種痘による予防法が確立されたことによって、その脅威はようやく軽減されていった。

もともと幕府の医師の要職を占めていたのは漢方医だったが、種痘法の成立は、蘭方医の地位を高めるきっかけとなった。紀州藩医が蘭学所で教授を務め、幕府の医師に登用されたのは、その流れのなかでの出来事だった。

幕末、江戸神田のお玉ケ池に種痘所が開設された際には、元紀州藩医たちも尽力した。「稲村の火」で有名な濱口梧陵による資金援助もあった。江戸時代の紀州の医療と言えば、華岡青洲が世界で初めて成功させた全身麻酔の手術が有名だが、種痘も、紀州藩のお家芸のひとつだった。

近代の医学者たち

江戸時代後半から幕末にかけて活躍した紀州藩の医師たち。その先駆者としての姿勢は、近代の医学者たちにも受け継がれた。

ビタミンAの抽出に成功した高橋克己（かつみ）、脚気（かっけ）の原因を突き止めた島薗（しまぞの）順次郎、女子栄養大学を創立した香川綾など、輝かしい成果を残した医学者が並ぶ。時代を経ても、紀州は医のトップランナーであり続けていると言えるだろう。

※表紙の図は『内科秘録』より

華岡青洲（1760～1835）

言わずと知れた麻酔医



宝暦10年（1760）、南蛮流外科医華岡直道の長男として、那賀郡西野山村に生まれる。天明2年（1782）から京都に遊学し、麻酔薬の開発を決意するとともに、それによる乳癌手術を志すこととなった。天明5年2月に帰郷、診療に従事する傍ら薬草の採取に努め麻酔薬研究を始める。

薬草マンダラゲを中心とした調合薬剤の効果と副作用を確かめるため、母・於継、妻・加恵を実験台に麻酔薬「通仙散」を完成させたが、実験の影響か母は死亡、妻は失明と大きな犠牲を払うこととなった。文化元年（1804）10月13日、大和国五条の藍屋勘という60歳の女性に対し、全身麻酔による乳癌摘出手術を成功させる。

その後、青洲は診療所と住居を兼ねた「春林軒」を設け、門下生に医術を教える。天保6年（1835）に没するまでに手がけた乳癌手術は156例に達し、華岡流外科術を学んだものは1861名にのぼるなど、近代医療の発展に大きく貢献した。



曼陀羅華

紀州医のトップランナーたち

まだ近代医学が確立されていなかった江戸時代。紀州藩は多くの医学者たちを輩出した。
新たな医療に果敢に挑戦した先駆者たちの道のりをたどる。

伊東貫斎（1826～1893）

駐日米国総領事ハリスを治療

江戸後期から明治にかけて活躍した蘭方医。江戸で伊東玄朴に師事し、大坂では緒方洪庵の適塾で学んだ後、玄朴の娘婿となる。安政2年（1855）、和歌山藩に召し出され寄合医師となったが、同4年（1857）には幕府の命により伊豆下田詰となる。下田にはアメリカ総領事館がおかれ、タウンゼント・ハリスが総領事として着任していた。貫斎は、ハリスが将軍家定に謁見した際には翻訳御用を勤めている。

ハリスが高熱で危篤状態となった際には、幕府は貫斎ら蘭学医を急派し、治せない場合は切腹して申し開きするように命じた。貫斎らは刀を病床のそばに横たえながら治療をほどこし、その甲斐あってかハリスは一命を取り留めた。

貫斎は、ハリスの病を治したことで名をあげ、幕府の奥医師や西洋医学所の教授を歴任した。

目良碧斎（1826～1895）

田辺初の洋医、貧病院を開設

文政9年（1826）、田辺に生まれる。藩医林尚謙に漢方医術を、京都の医師日野鼎哉に西洋医術を学び、嘉永元年（1848）郷里にて開業。田辺最初の洋医といわれ、率先して種痘を導入し、多くの患者を治療した。

明治5年（1872）多屋平太夫と図って資金を作り、貧病院を開設。明治20年、磯間浦に初めて海水浴場を設け「三壷崎」と名付けて海水浴の効能を説いた。

明治28年（1895）2月没。著書に「碧斎石譜」「熊野雑誌」「鉛山温泉記」などがある。

小山肆成（1807～1862）

国産の天然痘ワクチンを開発

「北の青洲、南の蓬洲」

小山肆成は現在の白浜町久木で生まれ、号を蓬洲という。若くして京都にでて医学を学び開業した。江戸時代、紀伊国の医学界では「北の青洲、南の蓬洲」として華岡青洲と並び評されている。

天保9年（1838）の暮れ、天然痘で甥の一家を亡くした。熊野地方で猛威をふるっていた天然痘の悲惨さを目の当たりにした肆成は、治療方法の研究に取り組む決意をし、家宝の刀剣を売って牛に換え、妻を実験台にして天然痘ワクチンの開発に没頭した。欧州では1796年に牛痘を用いたワクチンの創出に成功しており、中国の書物によって牛痘種痘法の情報は入手できたが、鎖国を続ける日本では自力で開発するしかなかった。

私財を投じて没頭すること8年、嘉永2年（1849）に日本で初めて国産の天然痘ワクチン「牛化人痘苗」の開発に成功する。欧州での開発から半世紀遅れたが、より強い免疫性を持つことで発病率は低く、たくさんの命が救われることになり世界的にも高い評価を受けている。



生家跡は小山肆成顕彰公園となっている－白浜町久木

濱口梧陵とお玉ヶ池種痘所


濱口 梧陵

江戸では、安政5（1858）年に伊藤玄朴をはじめとする蘭方医83名が出資し、神田に「お玉ヶ池種痘所」がつくられた。しかし、この江戸で最初の種痘所は開設半年あまりで火災にあい焼失してしまう。天然痘の予防及び治療を行うには種痘所の再建が急務だったが、蘭方医たちにはその資金を調達する余力がなかったため、銚子の豪商・濱口梧陵（ヤマサ醤油7代目）に援助を頼んだ。

「稲村の火」で知られる梧陵は家業にとどまらず、社会福祉事業や政治活動に尽力していた。援助の要請を快諾した梧陵によって300両が寄附され、それをきっかけに他の有志からも寄附が集まって種痘所は再建した。万延元年（1860）に種痘所が幕府直轄となってからも、梧陵は書物や医療器具の購入資金として400両を寄附している。

種痘所はのちに「西洋医学所」となり、明治新政府に引き継がれてからも改称を繰り返し「東京医学校」となった。これが東京大学医学部の前身である。


お玉ヶ池の跡地に建つほこら－東京都千代田区


お玉ヶ池種痘所の記念碑－東京都千代田区







華岡青洲ゆかりの地を巡る

紀の川市の東部に位置し、古くから大和街道が東西に走り、殿様の宿泊所が置かれるなど宿場町として栄えた町。世界で初めて全身麻酔下で乳がん手術を成功させた華岡青洲の出身地として有名で、偉大な外科医の面影を追いながらぶらり散策を楽しむ。

名手駅を起点とし、駅からほど近い「**旧名手宿本陣**」へ向かう。参勤交代で江戸に向かう紀州藩士が宿泊所として利用した住宅である。華岡青洲の妻である加恵の実家とも言われている。名手宿本陣の前の道、大和街道を東へてくてく歩く。細い道路だがきれいに舗装されており歩きやすい。国道480号線に出ると進路を北へとる。高架をくぐると少し坂道になり500~600mほどで「**龍之渡井**」に到着する。

龍之渡井は、川の上に水を通す水路橋（掛樋）である。散策した時期は田植え前であり、満々と水が流れていた。当初は木造の橋だったが、幾度か水害で流され、大正時代にレンガと石積みで改修された。小田井用水に沿って遊歩道が整備されており、水流の音が心地よい。遊歩道を歩いていくと「**道の駅 青洲の里**」の裏手にある公園に着いた。途中から遊歩道をはずれ、山道を歩いても道の駅にたどり着ける。こちらのコースものどかな山道で歩きやすい。



ランチバイキングがサイクリングやバイクツーリング客に人気で、自桃のソフトクリームを堪能した。しばらく休憩した後、隣接している「**春林軒**」を訪れた。

春林軒は華岡青洲の住居と診療所・医学校を兼ねており、蝋人形や音声などでリアリティがある展示で興味深く見学できる施設だ。近くにある「**名手八幡神社**」に立ち寄り、優雅な三社殿を拝んだ。それから最終目的地である名手駅近くの「**光明寺**」へ向かう。

光明寺は名手中心部の町中にある寺院だ。樹齢400年といわれ高さが70㎝のところで傘状に広がっている光明寺の松が有名だ。そこから名手駅まで歩き全行程が終了。今回は約5㎞の距離で所要時間は3時間程の半日コースだ。ランチを絡めて軽めの散策を楽しむにはちょうど良い。



③道の駅青洲の里

ひときわ目を引く建物は建築家·黒川紀章氏の設計。医·食·自然·健康がテーマで、華岡青洲の業績を学べる展示室を中心に、地元の旬の食材を使用したバイキング、ふるさと物産ショップなどが楽しめる。



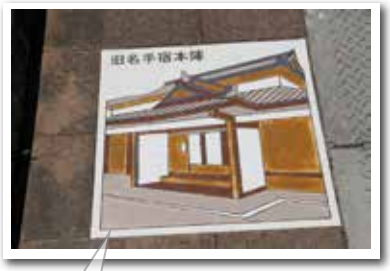
②龍之渡井（たつのとい）

紀州藩主であった徳川吉宗の命でつくられた小田井用水の施設。土木技師の大畑才蔵が手掛けた水路橋で、これらの施設により紀の川北側の土地に広大な水田が生まれた。



①旧名手宿本陣（きゅうなてしゅくほんじん）

大庄屋である妹背家の邸宅。江戸時代に参勤交代時の藩主の宿舎（本陣）として利用されたことから名手本陣と称されている。華岡青洲の妻加恵の実家といわれており国の史跡·重要文化財に指定されている。

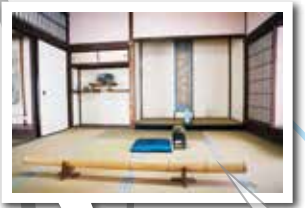


道路のタイルがデザインタイルになっている



リアルな人形に少しびっくりするかも





身分の高い武士が宿泊した部屋





暑い日は水分をこまめにとりましょう



⑥光明寺の松

天正15年（1583）境内拡大の時、村の富豪惣助が自邸にあった松を寄進し植えられたものと伝えられている。樹齢は約400年と推定され、高さはわずか70㎝で幹が傘状に伸びている。和歌山県指定文化財天然記念物。



⑤名手八幡神社

紀北御開拓の祖神、丹生都比売大神が降臨した聖地にして、名手の産土神（うぶすなのかみ）として地域の人々に親しまれている。本殿三棟は昭和31年に和歌山県指定文化財に指定されている。



④春林軒

華岡青洲の住宅兼診療所で、医学校でもあった。母屋と蔵は当時の建物のままで、青洲が初めて麻酔手術を行った部屋などを、人形や音声を使ってリアルに再現しており当時の雰囲気を体験できる施設となっている。

⚠見学するときはマナーを必ず守りましょう。



紀州藩の川上で盛んだった「川上木綿」
―『紀伊国名所図会（二之巻）』より

明治時代に高野口で創案された「再織」
現在、手織り教室も開かれている

“ふわふわ”を活躍させる産地力

ものづくり
at 橋本市
高野口パイル

橋本市高野口町はパイル織物工場が集積する珍しい地域であり、日本一の生産高を誇る。近年、生産量は減っているが、思いがけない分野に活躍の場を広げている。

パイル織物と高野口

パイル織物は、表面が立ち毛、毛羽で覆われている布地のこと。高野口地方では、織物の基布に毛（パイル糸）が織り込まれている特徴があり、織物と編物のどちらも製造されている。身近なもので言えばエコファーといわれる毛皮調のもの、電車の座席などに使われるモケットといわれる布地、カーテンや服地に使われるベルベットなどが分かりやすい例だろうか。

高野口町は江戸時代から木綿織物が盛んな地域だ。もとは農家の副業として始まったが、紀の川が流れる町内は水量に恵まれ、織物の染色に適していたため、地場産業となった。

「高野口パイル」の原点は、明治のはじめに前田安助氏が「再織（さいおり）」という特殊織物の製法を創案したことに由来する。「再織」は縦横の糸を1本ずつ交差させて織った平織を縦糸に沿って裁断し、モール状に。それを横糸にして再度織り上げれば計算された色の配置から、表と裏が同じ柄になる凝った仕上がりとなる。

その後、昭和のはじめにド





シンカーベロアの編立機。編立後、シャーリングする

イツから二重パイル織機を導入。昭和30年代、合成繊維の開発と物不足を背景に生産量は右肩上がりに増えていった。工場は増加し産業は盛り上がりを見せる。

しかし、アジアから安い布地が輸入され始め、バブル期を前後に生産量は減少していく。600億円あった昭和60年代と比べると現在は10分の1だ。

「ほぼ日手帳」のカバーに

厳しい状況の中、産地は努力を続けている。高野口のパイル織物業者が集まる紀州繊維工業協同組合は、15年前から毎年、東京で展示会「ぷわぷわ展」を開催し、用途や販路拡大につなげている。

その質の高さを評価され、アパレルでは国内外のトップブランド、インテリア、寝具、新幹線のシートなど高級な商材に採用されている。また新たな試みとして、オリジナルブランドで販売する生産者も増えてきた。触ってみたくなる〝フワフワ〟した風合いの模様が目を引くポーチや財布などをネットで販売。平成29年（2017）には糸井重里さんで有名な「ほぼ日手帳」のカバーに採用された。

災害対策用や産業用資材にも

地場産品を活用しようと、橋本市と紀州繊維工業協同組合とがタイアップし、「災害対策用備蓄毛布」を開発した。防災士のアドバイスをもとに、高野口で生産されるパイル織物毛布を、行政が購入しやすい価格帯に改良した。触ってみると、一般的な不織布で作られた備蓄毛布とは手触りや温かみがまるで違う。併せて毛抜けがしづらく毛玉ができにくい特徴がある。災害時の不安やストレスの軽減につながりそうな仕上がりだ。橋本市は近隣の自治体にも普及を勧めている。

布地以外にも応用され、産業用資材としても用途が広がっている。テレビやスマートフォンなどの液晶パネルの生産に欠かせず、デジタル機器の製造現場で活躍している。また、OA機器内や製造ラインでは、伝導性のある繊維を用いたパイル織物のブラシが欠かせない。ほかにも、排水処理の設備に用いられ、環境保全に一役買っている。

ブランド力をアップさせる

紀州繊維工業協同組合参事の西正幸さんが「おもしろい商品ほど詳しく明かせないんです」と言うように、隠れた場所での活躍が光る。「生産者によって設備に違いがあるので、多種多様なパイル織物・編物が生産できる地域です。目的にぴったりあった生産者を紹介しあって、『高野口パイル』のブランド力をこれからも高めていきたい」と西さん。産地の地域力でより一層ブランド化がすすんでいきそうだ。







左　パイル織物資料館（橋本市高野口町名倉）に展示されている「再織」の織機
右上　編み上げた布地をシャーリングすると模様が現れる
右下　手ざわりのよい「高野口パイル」の災害対策用備蓄毛布

わかやま魅力発信人

近畿大学名誉教授
紀伊万葉ネットワーク会長

村瀬憲夫さん



万葉の息吹を伝える

今回は愛知県出身で、紀伊万葉ネットワークの会長を務める村瀬憲夫さんに、万葉学者の目で見つめる和歌山の魅力を語っていただいた。

初来県は「万葉の旅」

初めて和歌山を訪れたのは、大学生の頃。万葉集に興味を持っていた村瀬さんは、ゆかりの地が多く残る県内を、北から南まで歩き回った。著名な万葉学者・犬養孝（いぬかいたかし）氏の著書『万葉の旅』を片手に、ユースホステルに泊まりながらの旅だった。

「万葉の時代を想像できるような大自然に触れ、さらに万葉集が好きになりました」との言葉通り、その後は万葉学者の道へ。第一人者として、多くの論文、著書を残し続けている。

昭和51年（1976）に和歌山大学で教鞭をとるようになり、和歌山に移り住んだ。それから40年以上、職場が変わっても、和歌山での生活が続いている。

とにかく明るい人たち



万葉歌の解説をする村瀬さん（右上）

引っ越してきた当初は、戸惑うことも多かった。特に違和感があったのは言葉で、敬語がなく、思ったことを率直に表現する和歌山弁は衝撃的だった。

それに加えて、女性を中心に、底抜けに明るい県民性も印象的だった。空も海も人もみんな明るい。最初はなかなかなじめなかったが、今ではすっかり和歌山気質に。

「和歌山生まれの妻に引っ張られています」と笑う。

和歌山の万葉スポット

好きな万葉の故地はどこかと問われれば、景色が良いのは和歌の浦、雑賀崎、白崎海岸。これらの場所は、知識がなくても十分楽しめるビューポイントだ。

有間皇子（ありまのみこ）の悲劇の舞台・岩代は、そのエピソードを知って訪れると、白浜まで見渡せる景色がしみじみと心にしみる。新宮の三輪崎は、雨の日に訪れるのがおすすめ。堤防沿いを歩くと、「苦しくも降り来る雨か三輪の崎　狭野の渡りに家もあらなくに」の風情がダイレクトに伝わってくる。

「大阪などと比べると、和歌山は万葉の風土が、

まだしっかりと残っています。ただ目で見るだけでなく、歴史のフィルターを通して見ることで、それらの風景はまた違ったものに感じられます」。知識を身に付けることで、魅力は何倍にも増していく。

子どもたちも親しんで

現在は、和歌山の万葉歌を発信する活動に取り組む紀伊万葉ネットワークの会長を務めている。万葉集に親しむイベント「万葉玉手箱」や、ゆかりの土地のウオーキングを開催し、万葉集を通じた地域の活性化にも一役買っている。

しかし、多くの人にとって万葉集は難しく、ハードルが高いのも事実だ。そのイメージについて、村瀬さんは「本当は素朴で親しみやすい歌集だということを伝えていきたい」と力を込める。万葉集には恋の歌も多く、「恋のトリセツ」と言っても過言ではないという。

現在考えているのは、百人一首のように、紀伊万葉歌でカルタをつくれないかということ。これからの和歌山を担う子どもたちや若者にこそ、万葉集に触れてほしいという思いがあるからだ。

「和歌山の人は、素晴らしい風土や文化に囲まれているのに関心が薄い。でも、これからの子どもたちにはその魅力を伝えていかなければならないと思っています」。万葉集と和歌山への思いは尽きない。



背の山二峯（かつらぎ町）でのウォーキング



村瀬憲夫

1946年生まれ、愛知県出身。1972年に名古屋大学大学院文学研究科修士課程を修了。和歌山大助教授などを経て、近畿大文芸学部長、近畿大中央図書館長、美夫君志会会長を歴任した。現在は近畿大学名誉教授、紀伊万葉ネットワーク会長を務める。主著に『萬葉集編纂の研究―作者未詳歌巻の論―』『万葉 和歌の浦―若の浦に潮満ちて―』『紀伊万葉の研究』『万葉びとのまなざし―万葉歌に景観をよむ―』など。

料金受取人払郵便

和歌山中央局
承認
4269

差出有効期限
2020年6月
30日まで

郵便はがき

6 4 0 - 8 7 9 0

和歌山市梶取17−2

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
&プレゼント」係

ふりがな				
お名前				
年齢　歳	性別 男 女	ご職業		
ご住所	〒			
電話番号				
クイズの答え	1 ・ 2 ・ 3	※あてはまるものを1つお選びください。		
本誌の入手場所				

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。



I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山

歴史とフルーツあふれる紀の川市

紀の川市長　中村　慎司

今号では華岡青洲の生誕地である紀の川市を取り上げていただきました。

華岡青洲は、文化元年（1804）、世界で初めて麻酔薬「通仙散」を用いて乳癌の摘出手術に成功しました。

紀の川市西野山にある「青洲の里」では、華岡青洲に関する歴史資料の展示や診療所兼医塾であった「春林軒」の公開を行っていています。道の駅にもなっていますので、観光スポットとしても賑わっています。

「春林軒」のほかにも、本年度日本遺産に認定された西国三十三所観音巡礼の三番札所である「粉河寺」、重要文化財となっている「鞆淵八幡神社」や「三船神社」、国指定史跡の「紀伊国分寺跡」や「旧名手宿本陣」など多くの歴史スポットがあります。また、紀の川市は豊かな大地と穏やかな気候に恵まれているおかげで、いちじく・柿・桃・はっさく・キウイ・いちごなどが旬に応じ栽培されている県内屈指のフルーツ王国です。

歴史とフルーツあふれる紀の川市にぜひお越しください。

手間をかけて育てられた桃

編集後記

先日、２歳の娘と近所の神社に行った時のことです。石灯籠の中を見たいと言うので、抱っこしてのぞかせ、何が見えるかと聞くと「おつきさま！」。確かに、のぞいた丸い穴の向こう側の壁には、三日月の形が彫られていました。調べてみると、丸い穴は太陽で、三日月形はやはり月を表しているとのこと。石灯籠では一般的なことのようですが、私は知りませんでした。その由来や、いつからのことなのかなど、興味がわいています。

知らないことを知るというのは楽しいことです。今号の内容を見ても、パイル織物とデジタル機器の関係や、濱口梧陵が医学の発展に尽くしたことを私は知りませんでした。読者のみなさんにも、「知らなかった」や「もっと知りたい」を楽しんでいただけるよう、これからも魅力的な誌面づくりに取り組んでいきます。

さて、『ほうぼわかやま』は、昨年度に続き「日本タウン誌・フリーペーパー大賞」にノミネートしました。昨年は読者投票部門で 25 位。今年はさらに上を目指したいと思っています。10 月から HP 上で投票できますので、ご協力いただければありがたいです。

編集長　宇治田 健志

株式会社ウイング
心を動かすコンテンツ　それが発信するチカラ
facebook いいね！

印刷物を中心に広報活動をお手伝いする会社です。「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。就職応援 BOOK COURSE（コース）の企画・制作も行っています。［沿革］創業 1972 年。設立 1981 年。

「ほうぼわかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で 2008 年から年２回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

設置場所：和歌山市内の郵便局、コミュニティーセンター、TSUTAYA WAYなど
詳しくはホームページをご覧ください。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ **http://w-i-n-g.jp**　ウイング 和歌山

協力機関　本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

紀州繊維工業協同組合、青野パイル株式会社、橋本市、紀の川市、小田井土地改良区、道の駅 青洲の里

クイズとアンケートで当たる!!



『再織ハンカチ』を3名様にプレゼント!!

ヒント　本号のどこかに答えが載っています

問題　紀州藩が開設した医学校の名前は？

①医学館　②史学館　③文学館

応募方法　Vol.22の答えは②興国寺でした。

このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函（切手は不要です）もしくは右記QRコードを読み取り、アンケートフォームからご応募ください。※応募はお一人様一枚限りでお願いします。

〆切 **2019年10月末日**

本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。

2019年8月1日　発行人／松下忠　編集人／宇治田健志　発行／株式会社ウイング

本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市榎取172　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　http://w-i-n-g.jp